

3 1

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
^{まさた ちえの} 蒔田智枝野	女 性	8 2 歳	1 6 歳	中宇利

① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。

豊川海軍工廠^{こうしやう}の爆撃^{ばくげき}が8月7日にあり、その日から13日まで後片づけ^{あとかた}をしていました。13日に歩いて中宇利の家に帰り、家にいました。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

中宇利で、12時の玉音放送を聞きました。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

「やっと終わった」という気持ちと、女は奴隷^{ど れい}になるという風評^{ふうひやう}があったので不安でした。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「豊川海軍工廠^{こうしやう} ～ 火の海を逃げました」

私は当時、青年団に入っていて、民生委員の人に海軍工廠^{こうしやう}に行くように勧められ、昭和20年4月に行き始めました。

私の海軍工廠での仕事は、第一男子寄宿舍の事務員でした。寄宿舍は正門の近くにありました。「空襲警報^{くうしゆうけいほう}」の合図があり、私たちはすぐに防空壕^{ぼうくうごう}の中に入りました。その防空壕は、長さ5、6m、幅^{はば}は1間（約1.8m）ぐらいで、上には木と土をかぶせてありました。そこに15人から20人ぐらいは入れました。

B29による爆撃^{ばくげき}は、すさまじいものでした。攻撃^{こうげき}が正門あたりから始まったので、近くはすぐに火の海になってしまいました。250キロ爆弾^{ばくだん}は、ものすごい音と地ひびきをたてました。防空壕が大地震のように揺れて、とても中にいられるような状態ではありませんでした。「直撃^{ちよくげき}されるから逃げろ」と言われ、毛布^{ず きん}、防空頭巾^{ぼうくうづきん}をかぶって、火の海を友達と二人で逃げました。

思い出したくもないことですが、寄宿舍の門を出ると人がバタバタ^{たお}倒れていました。近くの防空壕^{ぼうくうごう}に入ろうにも、死体が転がっていて入れません。投下された爆弾で、防空壕^{ぼうくうごう}が埋もれてしまったところもありました。私は、必死に逃げました。爆弾の中をぬうようにして、伏せたり、走ったりしました。川^{かわ}を渡り、どこをどう通って行ったのかわからないまま、牛久保の小学校に着きました。そこでおにぎりを一つもらい、やっと生きた心地がしました。

その後、火がおさまるのを待って工廠^{こうしやう}に戻りました。帰る途中、傷を負った人、亡くなった人をいっぱい見かけました。戸板に乘せられて運ばれる制服^{せいふく}を着た挺身隊^{ていしんたい}の子もいました。

工廠^{こうしやう}へ戻って驚^{おどろ}きました。建物はほとんど燃えたり壊れたりしていました。機械^{きかい}も土に埋^うもれています。一面灰色^{はいいろ}の世界で、あたりにはたくさんの遺体^{い たい}が飛び

散り、あまりのひどさに目を向けられませんでした。体中血だらけでうめいている人もいたようでした。私たちが泊^{とま}っていた第3女子寄宿舎は、跡形^{あと しかた}もありませんでした。

事務所へ行くと、男の人たちが「無事だったか。よかった、よかった。」と喜んでくれました。同じ事務所で働いていた人は15名ぐらいいましたが、運よくみんな助かりました。でも、同じ部屋で寄宿していたのは奥三河^{おく み かわ}の人たちが多く、15人のうち生き残ったのは私と名古屋の友達^{なみだ}のたった二人だけでした。みんな、亡くなってしまったのです。

富岡や中宇利の同級生も大ぜい亡くなりました。防空壕の中で爆弾の直撃にあって亡くなった人もいます。小畑の牧田和子さん*1は、お父さんが同じ工場で守衛^{むすめ}をしていました。娘さんが戻らないので、避難した防空壕を知っているお父さんが土に埋^うまった防空壕^ほを掘って、娘さんを出したんです。こんな悲しいことがありますか。お父さんの気持ちを思うと、今も涙^{なみだ}が出てきます。

私たちの寄宿舎は燃えてしまったので、片づけをする間、豊川^{いなり}稲荷^{しよくりよう}の近くにあった第1女子寄宿舎に泊まることになりました。その間の食事は、食糧倉庫が熱でむされたようになったためか、お米はこげくさく、異様^{いよう}なおい^いがして、とても食べられるようなものではありませんでした。そんなごはんは大根が一切れだけでしたが、それでも無理をして口に入れました。

8月13日まで片づけに追われました。その日に、やっと休みをもらえることになり、歩いて帰りました。新城まで線路づたいに歩き、中宇利の家にたどり着いた時は、「よく生きていた。」と父母が泣いて喜んでくれました。

○ 海軍工廠の食事

でんぷんご飯、大豆ご飯、大豆がすご飯でした。私の家は農家だったので、お米は何とかなっていたので、工場で食事だけは本当につらい思いをしました。大豆がすご飯^{ふくつう げり}の時は、無理をして食べましたが、腹痛で下痢^{げり}になってトイレに走りました。

海軍工廠に勤めていた近所^{とど}の人が、守衛として正門にいつも立っていた富岡の川村自転車屋のおじさんに、お母さんがにぎったおにぎりを時々届けてくれました。私だけが食べるわけにはいきませんので、部屋でみんなで少しずつ分けて食べました。みんな「おいしい、おいしい」と言って、喜んでくれました。



(写真提供…桜ヶ丘ミュージアム)

▲ 海軍工廠の食事の様子

*1 P-63-参照

「梅沢（旧姓）さんのおにぎり，本当においしい」と言って楽しみにしてくれました。みんなが喜んでくれるのがうれしかったです。その子たちがみんな亡くなってしまったのです。何とも悲しくて，あのうれしそうな笑顔が今でも目に浮かびます。

○ ノミの苦勞

工廠は，ノミが多くて大変でした。朝起きるとノミをつぶすのが日課でした。着るものの裏にいっぱいいて，何回かお湯で煮沸しましたが，どうしても退治できなくて，みんなノミに苦しめられました。

○ 中宇利の兵士の見送り

出征される兵士の方や村の人たちが八幡神社に集まり，そこで参拝をしました。その後で隊列を組んで，宇理尋常高等小学校の1年生から高等2年生まで全員が行列に加わり，村境の送迎の碑があるところまで送って行きました。

ラッパを青年団が吹き，私たちは軍歌を歌って歩きました。「勝ってくるぞと勇ましく～」とか「見よ東海の空あけて～」という歌でした。村長さんや兵隊さんは，上に上がる道の所に立って，あいさつをされ，みんなの万歳に送られていきました。村の主な人や親せきの方は，自転車で新城駅まで行ったと思います。

○ 学校での勉強

昭和18，19年は，今の八名中の場所にあった青年学校に通っていました。当時は，わら人形を作って，竹やりで突く訓練やなぎなたの練習が毎日のようにありました。また，運動場がサツサイモ畑になっていて，冬は麦を栽培していました。馬を2頭飼っていて，馬耕訓練や馬耕大会というものもありました。馬を使って，田んぼを速く上手に耕す競争でした。

○ みなさんに伝えたいこと

私は4年生ぐらいから家の手伝いをしました。3人兄弟の長女だったので，私がやらなくてはと思い，一生けんめい働きました。お風呂，夕食作りなど家の中のことは何でも引き受けました。田畑の仕事も手伝いました。

家が農家だったので，お金は無くても，食べることは大丈夫でした。苦しい時を乗り越えられたのは，百姓をしていたおかげです。食べるものを人にあげて喜んでもらうことができます。これは，お金には代えられない喜びです。みなさんも，体を張って働けば，きっと大きな実を結びます。一生けんめい働く人になってほしいです。



▲ ほのぼの絵手紙より（中日新聞提供）